

支持体と触覚について

大阪芸術大学 美術学科 教授 日下部 一司

1994年に写真工業出版社から「手作り写真の手引き・荒井宏子著」が出版されている。巻頭で写真家・細江英公氏は「古典的プリント技法の今日的意義」という題名で一文を寄せている。その中で「写真術の発明以来150年余りの間続いてきた銀塩の写真からエレクトロニクスの写真に移り変わるかもしれないし、あるいはその両者が複合した新しい写真が生まれるかもしれない」と、当時の写真状況を表現している。

エレクトロニクスの写真という表現が当時らしいが、写真のデジタル化への流れに敏感に反応している。「豊かな社会が進めば、文化は卑俗、低劣なものになり、偉大なもの、高貴なものは失われる。」という、スペインの思想家オルティガ・イ・ガゼットの言葉を引用し、当時注目され始めた古典的プリント法の可能性を述べている。それから28年の歳月が経ったが、状況は徐々に「エレクトロニクス」化してきた。

昨今では、新型コロナウイルス感染拡大を防ぐ目的でインターネットを使ったコミュニケーションが盛んになってきた。今後もこうした方法は改良されながら活用される方向に向かうに違いない。

バーチャルリアリティという言葉が使われるようになって久しいが、知覚や人と人の意思の伝達方法に変化が生じている。テレビの向こうのニュース番組のゲストたちがモニター越しに出席し、いくつかのモニター同士が討論する光景を、テレビというモニターで見るという不思議な光景を体験すると、人間のコミュニケーションはどう変化していくのだろうと興味深い。研究課題の「支持体と触覚について」はこのような状況において、今一度写真の支持体、そして触覚について考えるために掲げた。

デジタル写真の欠落している部分は触覚である。あるいは物理的な重さである。デジタル写真はあくまでデータであり、それを可視化する過程で触覚を得ることができる。世界人口は78億人と言われているが、Webサイトで発信することで一瞬にして78億の他者に情報を提供することができることはデジタルの優れた点である。

モニターに映る写真はガラス面の触覚とスマホの重量が支持体となって見ることができるし、プロジェクターにより壁面に投影された写真も壁面の凹凸を取り込んだ触覚性を持つのである。しかし、電源を落とすと写真は姿を消しデータの世界へと消えていく。そういう不在感そのものがデジタル写真なのだ。この場合写真は情報であり、物ではない。その分野の映像研究は今後ますます盛んになっていくことだろう。

私の場合は、写真における「支持体と触覚について」実際の制作の中でいくつかの項目の実験を続けている。

一昨年ほど前から「雑巾がけ」という古典技法を研究している。雑巾がけはもともとは海外からレタッチの方法として伝わった修正技術を大正期のアマチュアカメラマンたちが表現に用いたことに始まる。修正のためのこの秘術を表現に用い進化させたのは日本だけだったようで、日本独自の技法だと言われている。当時はこの技法に正式名称はなかったようだが、今日では「雑巾がけ」と言う正式名称で呼ばれている。パライタ紙に印画された写真の表面に、布を使って油絵の具を塗る様子が「雑巾がけ」に似ていることからいつのまにか「雑巾がけ」という技法名になってしまった。

印画紙の種類が激減した現在、この技法を使用するには不自由さがあるが、いくつかのパライタ紙を用いて実験を行う上で最終的に「Ilford Multigrade Art 300」という印画紙に出会い本年度は作業が劇的に進んだ。この印画紙の表面の細かい凹凸がちょうど銅版画のメゾチントの表面のようであり、油性絵の具を乗せると定着も程よく絵画的な表情を作ることができる。印画紙との出会いと技術的な工夫が技法的な完成へとつながった思いである。この技法で多くの作品を制作し、ウエストベスギャラリー（名古屋）・ギャラリー勇斎（奈良）で数十点の展示発表を行うことができた。

こうしてできた写真作品をデジタルカメラで複写し、それらをもとに折りたたんで冊子状にする印刷物の制作を行った。書籍等の冊子は手に取って紙の質感・色合い・触感・重さ等を感じながら頁をめくら見る仕掛けになっている。特に頁をめくる行為は、展覧会場の壁面から壁面へ、あるいは会場から会場に移る視覚の移動に似た構造になっている。一枚の頁が展覧会場の壁面になるような感覚で63枚の写真作品を6面の紙面に構成したのである。実際の画廊スケールとは異なる小さな3次元空間ではあるが、それだけに手の中で変容する視覚作用の実験は、印刷物の表現としての可能性を感じさせるものだった。

また、版表現としての写真というテーマでも継続して研究を進めている。これはシルクスクリーンで印刷され盛り上がった小さな点（顔料という物質）がイメージを生み出す様子を、できる限り再現性を高めることで可能にしようとする試みである。本年度はディザ分解によるCMYK四色のカラー印刷を中心制作を進めた。様々な技術的な工夫により目標に徐々に近づき始めている。今後も継続して研究を進めたい。